# 春の戴冠（上）

辻邦生

新潮社

# 春の戴冠（はるのたいかん）

（上）

© Kunio Tsuji, Printed in Japan, 1977.

発行　1977年5月25日
3刷　1977年7月10日
著　者　辻邦生（つじくにお）
発行者　佐藤亮一
発行所　株式会社新潮社
郵便番号 162
東京都新宿区矢来町71
電話 (03) 266（業務部）5111
（編集部）5411
振替　東京 4-808
装幀者　宮脇愛子
印刷所　二光印刷株式会社
製本所　大口製本株式会社
定価　1700円

乱丁・落丁本は，御面倒ですが小社通信係宛御送付下さい。送料小社負担にてお取替えいたします。

*Quant'è bella giovinézza*
*Che si fugge tuttavia!*
*Chi vuol esser lieto, sia:*
*Di doman non c'è certezza.*

うるわしき若さも
とどむすべなし
愉しみてあれ
明日知らぬ身なれば

——ロレンツォ・デ・メディチ——

# 春の戴冠（上）　目次

第一章　悲しみの森　7
第二章　道しるべ　58
第三章　渦のなか　109

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.com

第四章　光と影　160
第五章　橄欖の木かげ　204
第六章　パンと葡萄酒　255
第七章　生命の樹　305
第八章　メディチの春　356
第九章　工房の人々　400

# 春の戴冠

（上）

# 第一章　悲しみの森

## I

わが都市フィオレンツァ（フィレンツェ）に生れた芸術家のひとり、アレッサンドロ・ディ・マリアーノ・ディ・フィリペーピ、世にサンドロ・ボッティチェルリと呼ばれる画家の回想を物語るにあたって、その前にしばらく私自身のこと、私とアレッサンドロの関係、私が現在置かれている状況について一言しておくことは、礼儀にも適い、また、私のうえにどっと押しよせてくる思い出の数々――そのなかには必ずしも愉しいとは言えず、胸をえぐりたてられるようなものもあり、すでに老齢にいる私には、果してそれを文字で書きあらわせるかどうか、危まれるものさえあるのだ――を整理し、混乱をまぬがれるのに適宜な手段であると信じるのである。それはまた同時になぜ私が友フィリペーピの回想に着手したか、それを詳細に徹底的に語ろうと思ったか、について、前もって説明してくれることになろうかと思う。

私の名はフェデリゴ・P＊＊、職業はわが都市フィオレンツァの一私塾の古典語教師である。いや、教師であった、と言うべきかもしれない。私はもうここ十年ほど弟子はとらず、家に引きこもって恩師フィチーノの著作やギリシア古典、二、三のイタリアの古記録などを読んでいるにすぎないからだ。

父マッテオは富裕な羊毛輸出入商であり、仕事のかたわら読書に専念し、著書も数冊残している。父は死に先立って自ら生涯書きつづけた日記を牘皮で装幀し、紫のリボンをかけて、市庁舎の図書室におさめた。これは父の他の著書とならんで、いまもなお、好学の士ならば、親しく手にとって読めるはずである。そのなかには、わがフィオレンツァの花々しい興隆の姿が、雲の低く垂れた北の町々、ロンドンやブリュージュやリオンやリューベックなどの賑やかな風景、また梱包された羊毛、穀物袋、皮革、オリーヴ油を満載したジェノヴァの船の風をはらんだ帆柱の軋りなどとともに克明に記されているのである。いや、それだけではない。父の日記にはその日々の羊毛の取引高、手数料の変動、輸出織物の数量なども、少し右斜めにかしいだ几帳面な字体で詳細に記されている。それはいかにも油断のない、綿密な、ねばり強い父の性格をよく表わした記述の連続であると、私は、それを読むたびに感じたものである。

もちろん温厚で、信仰にも篤かった父は、そうした記録のなかに、神の摂理を讃える言葉を丹念に記すことを忘れなかった。事実、ながい航海を終えて港に入ってくる船荷にふくれあがった船を見れば、父ならずとも、おのずと神の加護を感謝せずにいられなかったろう。父のような商人にしてみれば、一航海一航海が財産の大半を賭けた博打のようなものだったのであろう。私は父の温和な、理詰めな性格のどこかに、奇妙にきらびやかで、ふてぶてしい、これみよがしな感じ——ちょうどフィオレンツァの町角を高笑いしながら過ぎてゆく派手な身ぶりの傭兵隊長（コンドッティエーレ）や、新大陸から戻ってきた航海者たちの持っている雰囲気と同じ感じ——に早くから気づいていたが、おそらくそれもこうした危い仕事の緊張から生みだされていたのにちがいない。

私は父の四番目の息子として生れた。そして私のあとに妹が二人あって、それが父マッテオの子供のすべてである。兄たちがそれぞれ家業を継いでくれたので、私の生涯ははじめから私自身の選択にゆだねられていた。むろんそう言えば聞えはいいが、本当は私は兄たちのようにとくに期待もされず、また期待を与えるような能力を早くから現わすこともなかった。一言で言えば、親たちにとって私は予定外の子供、生れてきた以上は人なみに可愛いが、といって是が非でも求めたわけではないといった子供だったのである。私は乳母と自分の部屋にいることが多く、家のなかでもあまり目立たなかった。兄たちは体力や記憶力や物まねの才などで父の賞讃を博したが、私にはそうした特技は何一つなかった。おそらく家のなかのこうした状態が、幼年期の私を、商売も異なり家風も違うフィリペーピ家の末息子アレッサンドロに近づけたのだと思う。もっともフィリペーピの家では、アレッサンドロは一番下の息子であったが、家の人々は彼を甘やかし、偏愛していたのである……。

しかしこうした環境は、私を決して陰気な子供にしたわけではない。むしろ家業の重荷や決められた方針から解放されていたため、私は早くから、物を利害にとらわれず、公平に判断する態度を身につけた。私は家の人々からも友人たちからも気のいいフェデリゴという渾名で呼ばれた。私はいまもって、自分が気がよかったかどうか判らないが、少くとも激情にかられて偏狭な判断を下すということはなかったように思う。いわば私はいい意味にも悪い意味にも野心というものを植えつけられずにすんだのである。

おそらくフィリペーピが後年、あれほど人を遠ざけ、自分の気持を誰にも打ち明けないようになったときでさえ、私だけを唯一の例外にしたのは、こうした私の性格のためではなかったろうか。むろん幼な馴染ということもあった。生涯同じ趣味をもち、行き来もよくしていた。しかしそれ以上に彼が私を話相手（コンフィーダンテ）に選んだというのは、彼の言葉を借りるならば私だと「気が休まる」からだったのである。

私はこの回想のなかにわが幼な馴染フィリペーピ——私たちのあいだの呼び名に従えばサンドロ——の日記や手紙



此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.com

類を引用できるのも、彼が死に際してその多くのデッサン、下図、作品のための手帳とともに、それらを私に遺贈していってくれたからである。（大きな完成された作品は主として兄シモーネや、寡婦になった嫂たちに贈られた）

もっとも私がこう書いてくると、読者諸氏――この哀れな老人の回想録に読者がいてくれての話だが、それもここ数年来の戦争、内乱、政変で荒廃しきったフィオレンツァではほとんど望めぬことになってしまった――は私がきわめて冷静に、理性の仄白い光に照らされながら、これを書き綴っていると思うだろうが、それはただ見せかけだけのことである。私は自分を制し、ペンが激しい感情にふるえるのを辛うじて押えているのだ。読者諸氏はこの老人の内心の葛藤をどうかご推量いただきたい。たしかに老齢のもたらす心弱さから、時に私は涙ぐむこともあるが、そうしたものは、礼節と羞恥のうえからも、この回想の文章から取りのぞいておきたい。私はあくまでこの回想録に平静な外観を与えておきたい。そうだ、少くともそれだけはまもり通したい――私はそう思っている。

むろん私が冷静でいられるわけはないのは、サンドロの生涯が私を興奮に駆りたてるばかりでなく、現在のわがフィオレンツァの荒廃と無気力と投げやりが日々私に奈落に落ちる思いを強いるからである。つい、さっきも私はサンタ・クローチェ門から市庁舎（シニョーリア）の広場（ピアッツァ）まで散歩したが、裏通りには汚物が流れ、腐った果物や魚が投げすてられ、扉の前の石段にうずくまる男たちの数も前にくらべて目立って増えていた。疲労と暗い気分が町全体を覆っていた。幾つかの邸宅は空家となり、鎧戸がこわれたまま、窓からぶらさがっていて、そこから黒い、虚ろな部屋が、盲目の眼のようにのぞいていた。

つい十年前まで、それでもなおこのフィオレンツァに感じられていた活気を知っている老人の身にとって、いまのこの陰気な、寒々とした、打ちのめされたような雰囲気が、精神への侮辱でないとしたら、いったいそれは何なのであろうか。たしかに私は町へ出るたびにまるで恥辱の鞭で我が身を打ちすえられるような気持がする。私は何もいまさら花のように美しかったジュリアーノ殿がサンタ・クローチェ広場で馬上から上気した顔を私たちに向けて笑ったそんな昔のことを言うつもりはない。せめてあの市庁舎（シニョーリア）前にフィオレンツァの心意気を示すのだといって、途方もなく大きく若々しいダヴィデの彫像を飾った頃の気力ぐらいは残っていてほしかったのだ。

いや、いや、これも老人の繰りごとかもしれぬ。ひょっとしたら、こんな打ちのめされたような都市（まち）でさえ、若い眼で見たら、あるいは花の都（フィオレンツァ）に見えるのかもしれぬ。そうかもしれぬ。いや、そうだとしておこう。しかしそれにもかかわらず私には、フィオレンツァの花の盛りが忘れられぬ。忘れられぬどころか、心について日夜私のなかへ息苦しく立ち現われてくる。あの頃は――私の子供の頃は、フ

ィオレンツァの都市はどこへ行っても槌音と陽気な笑い声と石だたみを鳴らす車輪の音で満ちていた。毎日、どこかの町角で新しい建物がたち、賑やかな祝宴が張られていた。若い娘たちが美しく着飾って、花飾りをめぐらした扉口から入っていった。楽しげな音楽がなかから聞えていた。通りすがりの人々にも自由に葡萄酒が振舞われた。子供たちは路地で大人の真似をして腕を組んで踊ったり、裳裾を曳いてゆく貴婦人のあとからついていったりした。

都門からはかたい石だたみの道を鳴らして馬車がひっきりなしに入ってきた。もしその馬車がサン・フレディアーノ門からやってくるとすれば、それはほとんどピサを経由してジェノヴァから送られてきた羊毛の袋を満載していた。御者たちは子供が通りに集まってくると、わざと口笛を鋭く鳴らしたり、革の長い鞭で地面をぴしりと打ったりした。そのたびに私たち子供は声をあげて町角の一方へひとかたまりになって恐怖の叫びをあげるのである。すると御者たちは得意満面でがらがらと私たちの鼻先を走りすぎてゆくのだった。

町には乾いた、埃りくさい羊毛の臭いがいつも漂っていたが、とくにこうして馬車が通りすぎたあと、それはことさら濃くむっと流れていた。

いや、いや、それに引きかえ、昨今のフィオレンツァはあの頃と同じ都市と思えるだろうか。蒼い顔をした若者が仕事もなくぼんやり広場に腰をおろしていたり、ぼろをまとった老婆が邸の石段で虱をつぶしていたりするような光景は、あの頃は見られなかった。断じて見られなかった。フィオレンツァの町の盛りは決して私の若い眼を通して見られたためではない。事実がそうだったのだ。あの槌音、馬車の音、娘たちの笑い声、仲買人たちの叫び、織機の音——眼をつぶると、そうした物音が昨日のことのように聞えてくる。

いったいこうしたものはどこへ消えていったのか。なぜフィオレンツァの花の盛りが過ぎてゆかなければならなかったのか。いや、それよりわが友サンドロはこうした町の移りゆきをどのような気持で眺めていたのか——私がこう自問するのも、いまになってサンドロが何度となくフィオレンツァの町の気分の変化について語っていたのを思いだすからである。私はその当時何一つそうした変りようには気づかなかった。たしかに兄たちの仕事は父マッテオの頃のように景気よくはなかった。ジェノヴァから送られてくる羊毛の量も減ったし、織布にして北のロンドンやブリュージュに送りだす梱包の数も昔のようではなかった。叔父の一家でもそうだった。従兄たちはローマにゆき、あるいはヴェネツィアに出ていった。しかし私はそれをすぐにはフィオレンツァの町の変りように結びつけて考えることはしなかった。反対に、それは父マッテオが商人として兄たちよりずっと優れた手腕を持っていたせいであると思っていた。叔父一家に対しても、私は花の都フィオレンツァを

すててゆく従兄たちにひそかな軽蔑を感じこそすれ、それが町全体を覆う眼に見えぬ変化のためとは、ついぞ考えることはなかったのである。

しかしこのことをぬきにしたら、サンドロが晩年なぜあのように苦しんでいたか、私には説明しかねる。当時誰ひとりとして、こうしたフィオレンツァの変りようを、貴やかに咲く花の芯が蝕まれているのと同じような意味合いで感じようとする者はなかった。これだけは私もはっきり断言できる。まさか、たとえばジュリアーノ殿が花の盛りの年齢で亡くなられたとき、サンドロのように数日というもの廃人のように放心して過した者がいたであろうか。たしかに私たちも降って湧いたようなその大事件に衝撃を受けた。都市(まち)じゅうの若い女たちはさめざめと泣いた。私でさえ、葬儀の列が花の聖母寺(サンタ・マリア・デル・フィオーレ)を出るとき、思わず熱いものが喉もとにこみあげてくるのをどうすることもできなかった。しかしサンドロの悲しみ方はそれとは違っていた。それは悲しみというより、恐怖の念に近かった。いまでもよく憶えている。私がジュリアーノ殿暗殺の報せを持ってサンドロの家にいったとき、まるで眼の前に何かおそろしいものでも見る人のように、彼は蒼白となり、唇をふるわせ、椅子のうえに頭をかかえて蹲ったのだ。彼はその後食事もろくにとらず、ふだん冗談口を叩く兄のジョヴァンニとも口をきかなかった。私はまさかジュリアーノ殿の暗殺がこれほどサンドロの心を動かすとは思ってもみなかった。それは日がたつにつれていっそう深刻になってゆくように思われた。だいいちサンドロの絵の制作は眼に見えてすくなくなっていった。何日も絵筆をとらぬ日さえつづいた。私はそんなある日、兄のジョヴァンニからサンドロが小康を得たようだから、遊びにきてもらえないか、という言伝(ことづて)を受けとった。

私がサンドロの部屋に入ると、彼は窓のそばに引きよせた椅子に坐って、ぼんやり外を眺めていた。窓の外には青葉が美しく太陽にかがやいていた。部屋のなかも淡いみどりの反射光に照らしだされ、なごやかな落着いた雰囲気に見えた。

サンドロは私の問いにこたえて、もうだいぶよくなった、どうも一種の熱病のようなものを患ったらしい、と、ひどく低い声で言った。

「ジュリアーノ殿の死がまさかそんな衝撃を君に与えるとは思わなかったのだ。許してくれたまえ」

私は蒼白くやつれたサンドロの顔を見て言った。

「いや、そのことではないんだ。ジュリアーノ殿じゃないんだ。ぼくには、何か――うまく言えないんだが、とにかく何か大きなものが、崩れてゆくのが見えたような気がしたんだ。そう、何かバベルの塔に似たものが……何かこう花やかに栄えていたものが……でも、それは熱のせいだったんだ。それに、ぼくはいつもこうなんだ。急に身体がだめになってしまって……でも、もういいんだ。もうすっか

り元気になったよ。あれは熱のせいだったんだ。ほら、こんなに太陽が美しくかがやいているものね。なんであんな気持になったんだろう？　病気だよ、病気のせいなんだよ」

果して病気のせいだったのだろうか。サンドロ、君にはすでにあのときわがフィオレンツァの運命のすべてが見えていたのだ。フィオレンツァの申し子だった君にはね。君はそれをぼくに隠そうとした。自分自身にさえ隠そうとした。君は自分をいつわって、また絵筆をとり、新しい作品を描こうとした。だが、一度、そうしたものを見てしまった君には、もはや前のように仕事をつづけるわけにゆかなかったのだ……。

だが、一切はいまだからわかるのだ。いまだから、説明がつくのだ。サンドロの苛ら立ち、意気沮喪、突然の陽気さ、気まぐれ――こういったものは、日々の絵画制作のあいだにサンドロを訪れたが、私はもちろんのこと、同じ家で起居をともにした兄たちでさえ、何がサンドロをこのように苦しめているのか、一向に理解できなかったのである。

読者はどうかこの哀れな老人のうえに前後の脈絡もなく押しよせてくる思い出の数々をそのまま書きつけて混乱をひきおこしていることを許してほしい。この老人の胸に――はた目には、死灰のように冷たくなり、もはや感情の温みも消えていると思われるかもしれぬこのしなびた胸に――埋み火のように熱く燃える激情が残っていることをどうか大目に見ていただきたい。私は、ことサンドロに関しては、なぜか、どんな些細な事柄にも、平静でいられないのである。ましてそれが私の愛してやまぬフィオレンツァの運命と結びついているようなとき、平静でいられると思うほうが、そもそも間違ってはいまいか。

私はサンドロが死んでからあと、このフィオレンツァの都市の移りゆきを眺め、戦慄し、絶望し、希望をとりもどし、ふたたび絶望した。私は世のつねの老人のように決して過去にのみ執着しまいとした。刻々に移る現在のフィオレンツァを愛そうと試みた。私は私塾に若い子弟を集めて古典語を教授するかたわら、彼らから新しい考え方、感じ方を学ぼうと心掛けた。しかしそれも年々私に不可能になってゆく。まるで流れすぎてゆく河から岸にむかって手をのばすようなものだ。たとえ一本の茎をつかむことができても、それはすぐ音をたててちぎれてしまう。

ある日、私はそうした生徒の一人をつれてロレンツォ・ディ・ピエロフランチェスコ殿の屋敷へいった。その大広間に例のサンドロの大作が並んでいたからである。私はもう広間に入る前から、自分の胸が幸福感にしめつけられるのを感じた。それは、私がその絵の前に立つたびに、恍惚とした思いに捉われるのを、前もってよく知っていたからである。

しかし私の弟子はサンドロの大作の前に立っても、私が

期待したような驚きの叫びをあげもせず、歓喜の溜息をもらすこともなかった。彼は注意深く画面を見て、黙ってじっと立っていた。時どき肩をすくめ、頭を右にかしげた。それがこの生徒の反応のすべてだった。私はしばらくして辛抱しきれずに、お前はこの絵をどう思う？　傑作とは思わぬかね、と訊ねた。生徒は画面に眼をそそいだまま、もう一度肩をすくめると言った。

「ええ、傑作と言えば言えるでしょうね。でも、いかにも不自然です。なんだか画面全体がこわばっているみたいですね。それに比例も遠近法も正しくありません。この人はちゃんとモデルを描く勉強をしたのでしょうか」

私はその言葉に自分が打ちのめされるのを感じた。いや、私は、脳天から斧で自分が叩き割られるのを感じた。自分が音をたててくだけてゆくような気がした。

私は、自分がようやくつかんだ岸の一本の茎が、ぷつりと切れる音を耳にしたような感じだった。生徒と私のあいだの距離はみるみる遠ざかって、私は、時の流れのなかに、いや応なく押しながされているのを実感した。

私にとってサンドロはほとんど生きる価値のすべてを表わしていた。サンドロが刻苦してつくっていった作品の傍らに自分がいたということが、私には、何にもかえがたい誇りであった。サンドロの絵の世界は、私の眼には、この世で眼のあたりにしうる奇蹟そのものに他ならなかった。それは言わば空中に花をまき、春さきの甘い香りをただよわすメディチ家の祭りの日の朝のような、地上の幸福の一切の表現だった。そこには地上の幸福が、自分の重さに耐えかねた花弁のように、思わず吐息をもらしてじっと無心に佇んでいた。豊かな幸福のはてに現われる仄かな甘美な憂鬱が、花明りの下を流れる宵闇のように、静かに画面に漂っていたのだ……。

だが、私の生徒はそんなものには眼もくれなかった。遠近法が不正確だ？　いったいそんなことが絵にとって何なのだろう。サンドロはわざわざそれを画面からとりのぞいたというのに。

「先生、ぼくにはよくわかりません。冷たい画面ですね、まるで凍りついたように。このヴィーナスの髪は、なぜこんなに固く糊づけしたように描かれているんでしょう。それに」生徒はくっくと短く笑って言った。「ここの波は、まるで鳥でも飛んでいるみたいに、両端がはねていますね。なんでこんな変な波を描く必要があるんでしょう？」

その必要はあったのだよ、私の時代にはそれが必要だったのだよ——私は心のなかでそう言ったが、それは声にならなかった。いや、声にならなかったばかりか、そのときの衝撃はそれからあと、生徒と別れて家に戻ってからも、なお私の心を震撼しつづけた。

「こんなわずかな歳月のうちに」と私は頭を両腕で支えながら机の前に坐って考えた。「サンドロの絵の真意がわからなくなるほど趣味や考えや感じ方が違ってゆくとしたら、

いったい私たちが生きて、これぞ真実、と思ってきたものに、本当の価値があるものだろうか。私たちが見たり、経験したりしたものは、すべて夢と同じように、何の根拠もなく、空中に漂っていたのであろうか。もしそうだとしたら、生きる根拠といったものは、いったいどこにあるのだろう。そんなものははじめからなくて、すべては空中に漂う夢にすぎないのであろうか。そういえば、過ぎてきた花やかなフィオレンツァの賑わいも夢にすぎないのかもしれぬ」私は悩ましい思いで考えつづけた。「私はながいこと、なぜサンドロが晩年に絵の制作に行きなやんでいたか、理解することができなかった。私は単純に彼の宗教心の問題からそれを考えようと努め、サンドロとそんな議論をかわしたこともある。だが、サンドロはいつも最後には黙って首をふるだけだった。何かを強く主張することもなかった。しかしいま思えば、サンドロはすでにあのとき、生とはこうした根拠のない夢にすぎぬと思っていたのかもしれぬ。彼にはそれをこえる確信がついにつかめぬままに、日々、この空虚さと戦っていたのかもしれぬ。そして最後に、空無のなかに楔を打つ仕事に疲れきって、一日一日と制作が苦しくなったのかもしれぬ」

だが、サンドロ、生とはそのように空虚なものだろうか

——私はロレンツォ・ディ・ピエロフランチェスコ殿の屋敷へゆき、半日近くサンドロの絵の前で過すようなとき、思わずそう彼に呼びかけずにはいられなかった。

「よしんばそれが根拠のない、夢のようなものであろうと、君がここに残してくれたこの作品は、そうした空しさに抗して立っている。たとえ私の弟子がそれを認めないとしても、そんなことは問題ではない。またいつか、百年か二百年か、あるいはそれ以上の歳月がたてば、人々が——すくなくとも生の空しさに浸された人々が、空無に対抗し、そのなかに自分の足場を支えるものとして、渇いたように求めるようになるだろう。いや、そうでなければ、それは生そのものが間違っていることになる。サンドロ、私はそれを何とか、私の分相応の方法で確かめてみよう。よしんば君がその生涯の最後の頃、その確信を見失っていたにせよ、それは——君が心血をそそいだその仕事は、決して空しいものでなかったこと、この空しさのなかに浮ぶ島のようなものであったこと、いや、永劫の暗黒のなかの燈台に火をかかげる仕事であったことを明らかにしてみよう。それが私の身にあまる仕事であり、老いた肉体を押しつぶすものであるにせよ、なんとか私自身に納得させ、またこの納得を通して、一つの確信へ近づくものとしよう。サンドロ、もしそれができれば、私も、この花の都（フィオレンツァ）が荒廃し、人々が離散したいまとなっても、過ぎた日々の姿を決して単なる夢と悔むこともなくなるにちがいない」

私は昔と今の相違が際立ち、その変りようが重苦しく私の心にのしかかってくるとき、よくあちこちのサンドロの作品を見に出かけた。寺院の礼拝堂のかげに掲げられた小



此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.com